

新刊紹介

佐藤寛・青山温子 編著『シリーズ国 際開発 第三巻 生活と開発』

佐藤 寛



日本評論社、2005年

国際開発学会の創立一五周年企画『シリーズ国際開発』（全五巻予定）の第三巻のテーマは「生活と開発」であり、本書を貫くキーワードの一つとして「開発のさざ波」をあげることでよい。

本書では、フィールド経験の豊富な一〇人の執筆者達が、各自のフィールドで直面した現実を出発点に、ミクロな視点からマクロな開発問題を捉え返す試みを行っている。開発事業／開発プロジェクトの様々な影響は、住民移転などのように大きな事件の中に凝縮されて現れることもあるが、グローバル化の進む今日、「開発」は日常生活の些細な出来事の中にさざ波のように押し寄せてくるのである。

開発理論を身につけ短期間の「調査出張」を行う研究者は、こうした「さざ波」にはなかなか気づくことはできない。一方その場に暮らす人々は「さざ波」を感じ取ることはできても、それがどこから、どのようにしてやって来るのかを理解することは難しい。これが、開発におけるマクロとミクロのギャップである。

この場合の「開発」とは単にODAが持ち込む援助プロジェクトに限られるものではない。途上国政府による道路建設であれ、多国籍企業の下請け縫製工場の開業であれ、グローバル化に伴う工業製品・消費物資の流入であれ、はたまたNGOによる「エンパワーメント」ワークショップであれ、日常生活に様々な「変化」をもたらすものすべてが「開発」である。

このような認識に基づいて本書では、途上国の人々の日常生活にとって、開発という社会現象がどのような意味を持つのかを「生活している人々の立場」から解き明かすこと、そしてその上で開発を支援しようとする立場に立つ我々が、何を考えるべきかを問いかけることを目指している。

本巻の構成は以下の通りである。まず序章「生活の中の開発、開発の中の生活」（佐藤寛）ではイエメンの小さな村を起点に、途上国における「生活」と「開発」がどのように絡み合っているかを、「モデルストーリー」的に述べたあと、章ごとの

各論に入る。第一章「生活と健康」

（青山温子）は、カンボジアのスラムを起点に、疾病対策と社会的・文化的要因の密接なつながりを解き明かし、ミクロの保健政策と国家、世界レベルの政策との間にどのようなつながりが必要であるかを示す。第二章「生活と栄養」（長谷部幸子）は「栄養素」という概念が、人々の食生活とかけ離れて一人歩きするとどんな奇妙なことが起こるのかを、ネパールやバングラデシュの事例に基づいて実証する。第三章「生活と教育」（磯野昌子）は、識字率・就学率の改善を目指すマクロな開発政策が、人々の生活レベルにどのような影響をもたらすのかをネパールの学校建設援助のエピソードを起点に解き明かす。

第四章「子どもたちの生活と開発」（勝間靖）は、子どもたちが、ユニセフをはじめとする世界の開発政策とどのような接点を持ちうるのかを、主にアフリカの事例をあげて説明する。第五章「水と森に支えられた生活と開発」（松本悟）は、ラオスの山間部の村がダム建設とそれに続く政治的混乱に翻弄されながらも、そのつど、水と森との関係を再構築しながら生き抜いてきた様子を記している。第六章「援助を受けとめる人々の生活と開発」（佐藤光）は、ミナダナオ島で活動する現地NGOとそれを支援する日本のNGOとの関係史をひもとくながら、「援助を受け止める人々」が決して受動的な人々

ではないことを示す。

第七章「農村生活と開発」（小國和子）は、カンボジアとインドネシアの二つの現場から、マクロな援助潮流にかかわらず、人々はミクロレベルでは「安定」を求めて日常生活を営んでいることを指摘する。第八章「生活と調査」（西野桂子）では、介入者が行う様々な社会調査は、人々の生活への共感がない場合には、被調査者の生活にどれほどの迷惑をかけるのかを、数多くの事例をもとに解き明かす。第九章「生活改善」と開発」（水野正巳）は、六〇年前の愛媛県の山村の生活改善の取り組みが現在の途上国の開発に持ちうる示唆を抽出する。

開発の究極的目的が「より良い生活」の達成にあるのだとすれば、国家規模、地球規模でのマクロな開発理論、開発戦略を議論することも大切だが、同時にそうしたマクロな潮流が、実際にはどのように人々の生活に影響を与えているのかを的確に把握する試みもまた「開発研究」として不可欠である。国際開発関連の書籍は近年増加しているが、マクロな開発政策動向とミクロな開発事例を地域横断的な視点で結びつける試みはほとんど行われてこなかった。この意味で本書は、「実務」と「研究」を橋渡しする、国際開発学会の一つの貢献のあり方を示していると言える。

（さとう かん／アジア経済研究所開発研究センター）